国立音楽大学附属高等学校　音楽科入学試験問題

令和六年二月十日
解答はすべて解答用紙に記入すること。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

色白で、ひょろひょろとしたひ弱な子どもを「もやしっこ」と言います。1 [1]、モヤシはけっして弱々しいわけではありません。むしろ、モヤシには植物の強い生命力があふれているのです。

植物の双葉の芽生えを思い浮かべてみてください。短い茎に双葉を広げています。ところが、モヤシは双葉を広げることなく、茎を長く伸ばしています。確かに、植物の芽生えとしては不自然な形です。

これは、モヤシは光を当てずに育てられるので、まだ土の中にいると勘違いしているためです。つまりモヤシは、地上に芽を出す前の地中での豆類の姿だったのです。

地中で発芽した植物は、少しでも早く地上に芽を出そうと、茎を伸ばしていきます。地上に出た合図は、太陽の光です。逆に言うと、光がない暗闇（くらやみ）で育つうちは、まだ土の中にいるということ。光を感じるまで、茎を伸ばし続けます。[2]、暗闇で育てられるモヤシは、あれほど茎が長くなっているのです。

地中では、双葉はまだ閉じられています。また、双葉の部分を上にして伸びていくと、土や石で大切な双葉が傷ついてしまうことがあります。それを防ぐため、双葉の部分を下に①ダらしています。そして、湾曲させた茎で土を押し上げながら、成長していくのです。その姿はまるで、子どもたちがおしくらまんじゅうで背中で押し合ったり、私たちが満員電車に乗るときに、頭から突っ込むのではなく、丸めた背中から割り込んでいくようすによく似ています。

モヤシは②傷みやすい野菜として知られていますが、それはモヤシがエネルギーを消耗しながら成長し続けているからです。モヤシは自分が [Ⅰ] にいると信じています。根っこを切られ、③フクロに詰められて、冷蔵庫の中に入れられても、光を求めて成長を続けます。モヤシが傷むのは、冷蔵庫の中で生きるための④ソウゼツな戦いをしているからなのです。

「もやしっこ」と※揶揄（やゆ）されるモヤシですが、その姿には、植物の芽生えのパワー[2]があふれていたのです。

モヤシは根から栄養分を吸っているわけではないし、太陽の光で光合成をしているわけでもありません。モヤシの成長のパワーは、すべて種子の中のエネルギーによるものです。

モヤシだけではありません。植物の種子の中には、発芽のためのエネルギーが詰まっています。

イネやトウモロコシなどイネ科植物の胚乳（はいにゅう）の主な成分は、デンプン[3]です。イネ科の植物は、このデンプンを分解して発芽のエネルギーを生み出しているのです。ごはんや麦、トウモロコシなどの穀類のデンプンは、私たち人間にとっても生きるためのエネルギーとなる重要な栄養分です。

車にもガソリンで動くガソリン車と軽油で動くディーゼルエンジン車があるように、植物の種類によっては、デンプン以外のものをエネルギー源とする場合もあります。

マメ科の植物は、タンパク質を発芽のエネルギー源としています。大豆が [Ⅱ] と呼ばれるほどタンパク質が豊富なのは、このためです。

ヒマワリやナタネの主なエネルギー源は、脂肪です。だから、ヒマワリやナタネから豊富な油が取れるのです。

ところで、大豆などマメ科の植物の芽生えには、4 ある特徴があります。

植物の種子は、植物の基になる胚（はい）と呼ばれる赤ちゃんの部分と、胚の栄養分となる胚乳という赤ちゃんのミルクに相当する部分からできています。

[3] お米は、イネの種子です。先に紹介したように、お米では、玄米についている胚芽と呼ばれる部分が胚に当たります。そして、胚芽を取り除いた白米が、胚乳の部分です。[4] 私たちは、イネの種子のエネルギータンクを食べているのです。私たち人間も種子と同じように、胚乳に含まれているデンプンを消化酵素で糖に分解し、さらに糖を呼吸によって分解してエネルギーを獲得しています。ごはんをもりもり食べると元気が出るのは、種子が発芽のエネルギーを作り出すのとまったく同じ仕組みなのです。

ところが、マメ科の種子には、この大切な胚乳がありません。

豆の大きな大豆のモヤシを観察してみましょう。豆の部分が二つに分かれています。これは、大豆だけではなく、すべての豆に見られる特徴です。たとえば、ビールのつまみで食べるエダマメの薄皮をむいて豆を見てみると、ちょうど立体パズルのように二つに分かれます。

二つに分かれたのは、双葉になる部分です。マメ科の種子の中には双葉がぎっしりと詰まっています。つまり、マメ科の植物はこの厚みのある双葉の中に、発芽のための栄養分をためているのです。

米に見られるように、ふつうの植物の種子は胚乳が大部分で、植物の芽になる胚の部分はほんのわずかです。しかし、少しでも芽が大きいほうが、他の植物との芽生え競争に有利です。そのためマメ科の種子は、エネルギータンクを体内に内蔵することで、限られた種子の中のスペースを有効に活用して、体を大きくしているのです。

⑤このように発芽のエネルギーを蓄えた豆類には、豊富な [Ⅲ] が含まれています。それなのに、どうして5 手間をかけて、わざわざ発芽を促してモヤシにして食べるのでしょうか。

じつはモヤシには、豆類にはなかった栄養分が、たくさん含まれています。

6 豆類は芽生えていく過程で、蓄えていたタンパク質や、デンプン、脂質などの栄養分を分解して、それを原料に植物が生きていくためのさまざまな成分を作り出します。だからモヤシには、ビタミン類やアミノ酸など、豆にはなかった栄養素が含まれているのです。

種子である豆類がエネルギータンクを備えた生命カプセルであったのに対して、モヤシは生命活動を行う生きている野菜です。モヤシは、生きていくための栄養分にあふれているのです。

（稲垣栄洋『一晩置いたカレーはなぜおいしいのか』による）

※ 揶揄（やゆ）……からかうこと。

問一 ═①～⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 [1]～[4]を補うのに最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ところで　イ だから　ウ なぜなら　エ つまり　オ たとえば　カ しかし

問三 ──1「これ」とは何を指していますか。文中の表現を用いて、「～こと。」につながる形で答えなさい。

問四 [Ⅰ]・[Ⅲ]を補うのに最も適切な言葉を、それぞれ文中から抜き出しなさい。その際、[Ⅰ]には三字の言葉が入ります。

問五 ──2「芽生えのパワー」を別の言葉で言いかえた表現を、これより前の文中から五字で抜き出しなさい。

問六 ──3「デンプンは、私たち人間にとっても……」とありますが、人間はどのようにしてデンプンからエネルギーを得ていますか。それがわかる一文を抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。その際、句読点も字数に含めます。

問七 [Ⅱ]を補うのに最も適切な言葉を、次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 畑の肉　イ 畑の米　ウ 畑の宝　エ 畑の薬

問八 ──4「ある特徴」について、次の問いに答えなさい。

①特徴とはどんなことですか。句読点を含めて十字程度で答えなさい。

②なぜこのような特徴をそなえているのですか。「発芽」、「芽生え」という語を用いて説明しなさい。

問九 ──5「手間をかけて」とありますが、どんな手間のことですか。文中の言葉を用いて十五字以内で、「～こと。」につながる形で答えなさい。

問十 ──6「豆類は芽生えていく過程で……」とありますが、筆者はモヤシをどんなものだと捉えていますか。それがわかる表現を、文中から十四字で抜き出しなさい。その際、句読点も字数に含めます。

二

これは、瀧羽麻子『虹にすわる』の一節です。徳井は東京で勤めていた会社をやめ、故郷に戻って祖父と二人、家具や電化製品の修理屋をしています。そこに突然、大学の後輩の魚住が現れ、徳井の家に居そうろうをはじめました。東京の工房をやめた魚住は、仏壇職人だった徳井の祖父の作業場を借りて、椅子の工房をやろうと徳井に持ちかけます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

魚住が十日ばかりでしあげると言っていた椅子は、六月の終わりになってもまだ完成しなかった。

「徳井さん、お願い。手伝って」

泣きつかれた徳井は、※1言下に断った。

「いやだよ。なんでおれが」

はなからそんな他力本願では先が思いやられる。もうひと踏んばりするか、それが無理なら①潔くあきらめたほうがいい。[1]夢を追うのも悪くはないが、そろそろ一度頭を冷やして、現実と向きあうべき頃合だろう。

「意地悪言わないでよ。今日、ひまでしょ？」

「そういう問題じゃないだろ」

かちんときて言い返す。確かに予定はないけれども、ひま人扱いされる筋あいもない。少なくとも、魚住には。

「ひとりでやるって約束じゃなかったか？」

「ひとりでやって、行き詰まったから頼んでるんだよ」

魚住が口をとがらせる。

「約束って言うなら、徳井さんだって約束してくれただろ」

「へ？」

「ほら、大学の夏休みに、あの展望台で。いつかふたりで工房やろうって」

「ちょっと待て、やろうって言ったのは魚住だよな？」

「でも徳井さんも、やらないとは言わなかったよね？」

ほとんど言いがかりである。

「一生のお願い。どうしたらいいのか、[2]意見くれるだけでいい。あとの作業は自分でやるから」

魚住に②コンガンされて、徳井は[1]作業場に入った。

前回とはうってかわって、中は散らかっていた。空っぽだった作業台に、大きさもかたちもさまざまな部材が並んでいる。床に落ちた大量の木屑が、歩くたびにふわりふわりと舞いあがり、ほの甘い木のにおいが鼻腔をくすぐった。

木工家具の製作は、まず木材を切るところからはじまる。製材所で買ってきた大きな板材や角材を、必要なサイズに切りわけていくことを、木取りという。木取りの後は、鉋をかけて厚みもそろえる。座面や背もたれといったカーヴのつく箇所は、さらに切ったり削ったりしてなめらかにととのえる。

部品がそろったら、③接合部の加工にとりかかる。木材を接合する、つまりくっつける方法はいくつかある。一番手軽なのは接着剤で、市販の量産家具でもチョウホウされている。釘やねじ、専用のジョイント金具を使う手もある。

一方、そういった便利な道具の力を借りずに木材そのものを細工してつなぐのが、組み手と呼ばれる昔ながらの手法である。部材の断面、専門用語でいうところの木口に、へこみとでっぱりをつけて組みあわせるのだ。つなぎめをぴったり合わせるのは難しいけれど、うまくできれば美しくて強度も高い。

この組み手に挑戦している途中で、魚住は挫折したらしい。

「何度やっても、ぴたっと合わなくて」

作業台に転がっている椅子の脚を拾いあげ、木口を徳井の鼻先に突きつける。歯車のようなでこぼこがついている。

「腕、上げたんじゃなかったのか？」

「だって、工房ではほとんど機械でやってたもん。おれ、ここんとこずっと、接合の担当じゃなかったし」

それなりの規模の工房や工場では、家具も一般の工業製品と同じく、機械を使って分業で作る。コンピューター制御で複雑な加工もこなせるような高性能の機種は、一台数千万円もすると徳井も聞いたことがある。ここにも基本的な電動工具はあるものの、家庭用に毛の生えたような代物で、差は歴然としている。

でも魚住は、その恵まれた環境に嫌気がさして、飛び出したのだ。工程の一部しか担えないのはつまらない、もっとじかに木にさわりたい、と言って。

「機械を使いたいって言ってるわけじゃないんだよ。ただ、手作業はひさしぶりで勝手がつかめなくて」

弁解する魚住に、徳井はあきれて反論した。

「ひさしぶりって、それならおれのほうがもっとひさしぶりだよ。卒業以来だぞ」

「徳井さんなら大丈夫だって。教授のお墨つきだしね」

木屑だらけの床に、魚住がひざまずいた。かすかに湾曲した椅子の脚を両手で捧げ持ち、徳井に向かって差し出してくる。

「お願いします、徳井先輩」

徳井はしかたなく受けとった。木肌の素朴な感触が、手のひらに伝わる。

「カエデか」

魚住が[2]と立ちあがり、汚れた膝をはらった。

「うん。じいちゃんのおかげで、いいやつ分けてもらえたんだ」
※2無垢の木材にふれるのも、徳井にとってはずいぶんひさしぶりだった。ほんのりとぬくもりを帯び、手のひらに心地よくなじむ。すでに家具のかたちとなって塗装のほどこされたものとは、当然ながらまるで違う。
この椅子も、組み立てが終わったら、あらためて全体にサンドペーパーをかけることになる。念入りに磨きあげ、肌に吸いつくような、すべらかなさわり心地にしあげる。表面の感触が重要なのは木製家具全般にいえることだが、中でも椅子は人間の体に直接ふれるので、特に神経を④遣う。
「木にさわってるときの徳井さんって、やらしい顔するよね」
魚住がにやにやして言った。無意識に部材の表面をなでていたことに気づき、徳井は手を離した。
「変なこと言うなよ」
「ああでも、こないだ、じいちゃんもおんなじ顔してた。てことは、遺伝か」
魚住の軽口は聞き流し、木口に目を落とす。むきだしになった木目が、ふぞろいな縞模様を描いている。
「座面と合わせるんだよな？」
「うん。これ」
手渡された四角い板にも、同じくでこぼこの細工がほどこされていた。試しに組みあわせてみる。力をこめればはまるし、見た目も不自然ではない。ただ、つなぎめを念入りにさわってみると、ごくわずかなずれが感じとれた。
徳井はふたつの部材をはずして、それぞれの木口を仔細に見比べた。
「ここだな」
座面のほうの、中ほどのへこみを指さす。
「表は直角に削れてるけど、裏がほんのちょっとだけななめになってる。だからずれるんだ」
魚住は木口に鼻の頭がくっつきそうなくらい、ぎりぎりまで顔を近づけた。やや寄り目になっている。
「ほんとだ。前も難しかったんだよなあ、ここ」
指で断面をなぞり、つぶやいた。
修了課題でも、魚住は接合部に苦戦していた。組み手が難しいのはわかりきっているのだから、金具を使えばいいのに、どうしても木だけで作りたいとこだわっていた。あのときは確か、ふたつの部材をくっつけることさえままならなかった。3あれに比べれば、確かに成長したといえるかもしれない。
めでたく完成した椅子は、いしやま食堂にひとまず置かせてもらうことになった。
人目にふれる場所に展示して受注につなげるというのが魚住の計画で、夕食どきにもそんな話をしていたところ、預かろうかと※3菜摘が申し出てくれたのだ。三人で相談し、レジ台のすぐ手前に置いた。店にはいろんな客がやってくるから、誰かしら目をとめてくれるかもしれない。
⑤センデン文句みたいなの、なにか書いたら？」
菜摘に大判のメモ用紙を渡された魚住は、しばらく考えた末に、［3］とペンを走らせた。
「あなたの体と心にぴったり合う椅子、作ります。いいじゃない！」
菜摘が満足そうにうなずいた。メモを受けとり、椅子の背にテープで貼りつけると、子どもの頭をなでるような優しい手つきで座面にふれる。
「すべすべだね。すごいよね、こんな本格的なのが作れちゃうんだ」
「おれと徳井さんの合作だよ」
魚住が胸を張る。
組み手の細工を見てやって以来、徳井は魚住から乞われるままに、他の部分にもあちこち手を入れた。横から手出しされるのはいやじゃないかと遠慮もあったのだが、魚住は屈託なく喜んでいた。徳井さんはやっぱ天才だね、とおだてるのも忘れない。4これでは魚住の思う壺だと知りつつも、やりはじめたらやりはじめたで、徳井もつい熱中してしまった。木肌にふれているだけで、なぜか気持ちが安らぐ。もしかして、魚住にもかからかわれたとおり、じいちゃんの血もあるのだろうか。
「律ちゃんもこういうの、できるんだ？」
菜摘が椅子から顔を上げ、意外そうに徳井をあおいだ。
「一応、大学の授業で習ったからな」
故郷に戻ってから、学生時代の話をする機会はほとんどなかった。椅子を作っていたというのも、菜摘にとっては初耳のはずだ。
「徳井さんは凄腕なんだよ。大学の先生もほめてたくらい。徳井さんが助けてくれなかったら、この椅子もできあがらなかった」
魚住が勢いこんで言う。
「おおげさだな。途中からちょっと手伝っただけだろ」
「ちょっとじゃないって。難しいとこ、結局ほとんどやってもらったし」
「律ちゃんは昔から器用だったもんね。学校の図工とかでも、なんでもちゃちゃっと作っちゃってたし」
菜摘が口を挟んだ。今度は、5徳井が意外に感じる番だった。相槌を打ちそこねていたら、いぶかしそうにたずねられた。
「あれ、自分では覚えてない？」
覚えてはいる。徳井は図工の成績だけはよかった。

ただ、学校ではろくに口を利きもしなかった菜摘に、そう認識されていたとはつゆ知らなかった。
「才能だよね。ほんと、うらやましい」
魚住も調子を合わせる。
「これからもよろしくね、徳井さん」

※1　言下（げんか）……　相手の言葉が終わった直後。
※2　無垢（むく）の木材……　無垢材。複数の木材を接着した集成材に対して、一本の木から切り出された木材をいう。
※3　菜摘（なつみ）……　いしやま食堂の娘。徳井とは同い年の幼なじみ。

問一　═①～⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二　［1］～［3］を補うのに最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。
ア　さらさら　　イ　のっそり　　ウ　しぶしぶ　　エ　いそいそ　　オ　ぴょこん

問三　═a・bの意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。
a　ア　はっきりしているさま。　　イ　ぼんやりとしているさま。　　ウ　わずかなさま。　　エ　ほぼ等しいさま。
b　ア　年長の人からの信頼。　　イ　権威のある人からの保証。
　　ウ　身近な人からの支持。　　エ　憧れている人からの激励。

問四　──1「夢を追う」とありますが、「魚住」の夢とはどんなものですか。それについて述べた次の文の〈　1　〉～〈　3　〉に入る最も適切な言葉を、それぞれ文中から指定の字数で抜き出しなさい。
工業製品のように、機械を使って〈　1　二字〉で作るのではなく、昔ながらの〈　2　三字〉という手法を用いて、職人がもっとじかに木にさわり、すべての〈　3　二字〉を担って仕上げる、椅子の工房を持つこと。

問五　木工家具の製作過程について述べられている部分は、どこからどこまでですか。文中から抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。その際、句読点も字数に含めます。

問六　──2「意見くれるだけでいい」という「魚住」に対して、「徳井」は具体的にどんな意見を与えましたか。文中から抜き出し、その最初の五字を答えなさい。その際、句読点や「　」も字数に含めます。

問七　──3「あれに比べれば……」とありますが、「徳井」は学生の頃の「魚住」と今の彼を比べて、どんな成長に気がつきましたか。「学生の頃は」という書き出しで、わかりやすく説明しなさい。

問八　──4「これでは魚住の思う壺（つぼ）だと……」とありますが、この時の「徳井」の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア　魚住は徳井に手伝いを続けさせたいのだと気づいているが、菜摘に感心されると自分でもつい本気で作業をしてしまう。
イ　魚住に手を貸すうちに夢中になったが、一人ですべて作るのが目標だった魚住の気持ちを無視したことを反省している。
ウ　魚住におだてられて気分は良いが、血のつながった自分より魚住の方が、祖父から目をかけられているのは面白くない。
エ　魚住の望み通りに手伝わされるのは面白くないが、本当は自分でも木工の仕事に魅力を感じていることを自覚している。

問九　──5「徳井が意外に感じる」とありますが、どんなことが意外だったのですか。説明しなさい。